

岐阜県における高速道路の整備とストック効果

1. はじめに

岐阜県は、御嶽山、乗鞍岳、奥穂高岳などの山々が連なる北部の飛騨地域から、濃尾平野に木曾三川（木曾川、長良川、揖斐川）が流れる南部の美濃地域まで、海拔0mの平野や3,000mを超える飛騨山脈など変化に富んだ地形と豊かな自然に恵まれており、古くから「飛騨の山、美濃の水」という意味で「飛山濃水」の地と呼ばれてきました。

日本列島のほぼ中央に位置し、7つの県に囲まれた内陸県であることから、五街道の一つである中山道といった街道を始めとし、古来より交通の要衝として東西南北の往来を支えてきました。

近年は、首都圏と近畿圏並びに太平洋側圏域と日本海側圏域を結ぶロータリーとしての機能を有する東海環状自動車道と、日本海と太平洋をつなぎ、東海と北陸をつなぐ東海北陸自動車道の2路線の整備が大きなストック効果を発揮してきました。

2. 東海環状自動車道

1) 東海環状自動車道の概要

東海環状自動車道は、愛知県豊田市を起点に三重県四日市市に至る延長約160kmの一般国道の自動車専用道路で、このうち岐阜県内の延長は約

100kmです。名古屋市の周辺30~40km圏に位置する愛知・岐阜・三重3県の諸都市を環状に連結し、東名・名神高速道路、中央自動車道、東海北陸自動車道や新東名・新名神高速道路などの高速自動車国道と一体となって、広域的なネットワークを形成する道路です。

豊田東JCTから関広見ICまでの東回り区間は平成21年に開通し、現在は岐阜県内・三重県内の西回り区間における工事が進んでいます。この12月14日には大垣西ICから大野神戸IC間が開通するほか、年度内に山県ICから関広見IC間が開通予定であるなど、全線開通に向け着実に整備を推進いただいているところです。

2) 東海環状自動車道によるストック効果

東回り区間の開通により本県では企業立地が進み、2000年と比較し150件以上の企業に進出いただきました。また、全線開通を見据えた企業立地も進んでおり、昨年の県内への立地は43件、立地面積で57ヘクタールと、ともに全国6位の好調を維持しています。

また、防災面では、豪雨や豪雪による災害、南海トラフ地震などに備える意味でも、広域的な緊急輸送道路として、さらには迂回路としての役割も期待されます。

岐阜県知事

ふるた
古田

はじめ
肇



3. 東海北陸自動車道

1) 東海北陸自動車道の概要

東海北陸自動車道は、愛知県一宮市を起点に富山県小矢部市に至る延長約185kmの高速自動車国道で、このうち岐阜県内の延長は約142kmです。延長10.7kmの飛驒トンネルを始めとした多数のトンネルを有することが特徴で、工事に多大な期間を要し、昭和47年の事業着手から36年経過した平成20年に全線開通しました。

また、本年3月に白鳥ICから飛驒清見IC間の4車線化が完成しましたが、残る約4割の区間が暫定2車線となっています。そのような中、「高速道路における安全・安心基本計画」（9月10日国土交通省発表）において飛驒清見ICから富山県の南砺スマートIC間が4車線化の優先整備区間に選定されるなど、全線4車線化に向けて事業を推進いただいているところです。

2) 東海北陸自動車道によるストック効果

開通から10年を数え、県内の沿線には109件の企業立地が進み、多くの雇用が創出されました。

また、観光面においては、インバウンドが大変好調であり、昨年の外国人宿泊者数は約148万人、伸び率は前年比52%増で全国1位となりました。

これらは、本自動車道をはじめとした高速道路

ネットワーク整備が進んでいることも要因と考えています。

4. おわりに

本県では高速道路を活用した魅力づくりに取り組んできており、沿線にはユネスコ世界文化遺産の「白川郷合掌造り集落」、ユネスコ世界無形文化遺産の「高山祭」、「古川祭」、本美濃紙の「手すき和紙技術」、世界農業遺産の「清流長良川の鮎」など世界に認められた地域資源が数多くあるほか、昨年オープンした「ぎふ清流里山公園」、「清流長良川あゆパーク」、「岐阜かかみがはら航空宇宙博物館」は予想を上回る来場者で大変賑わっております。

さらに、東京オリンピック・パラリンピック開催による観光ビッグイヤーを目前に控え、来年7月にオープン予定の「岐阜関ヶ原古戦場記念館(愛称：関ヶ原メモリアル)」を拠点とした戦国武将観光の推進や、好調な企業誘致をさらに加速させるためにも、東海環状自動車道や東海北陸自動車道といったストックをより有効に活用し、地域の活性化につなげていきたいと考えています。

こうした効果を最大限発揮するため、一日も早い全線開通や4車線化の完成を心より期待しています。